

論文の和文要旨

論文題目

「肯定の詩学」と「否定の詩学」——キューバ革命と作家たち

氏名

久野量一

本論文は、キューバ文学に二つの詩学——「肯定の詩学」と「否定の詩学」——を設定し、革命によっていかにその構図が変容させられていくのかを立証したものである。

革命前は共存していた二つの詩学は、革命後、「否定の詩学」が退場を余儀なくされ、革命前の「肯定の詩学」を引き継ぐ新しい文学が生まれる。その過程を証明するために、10名以上の作家と作品を採り上げ、彼らの表現を通じ、文学者がキューバ社会において大きな役割を演じてきたこと、そしてその役割ゆえに、革命期には政治と文学が緊張関係を持ったことを確認し、「肯定の詩学」と「否定の詩学」という美学上の議論が、キューバ人にとって根源的な立場の選択になっていたことを明らかにした。このような過程をたどりながら描出される文学史は、革命前から革命後、現在に至るキューバの出版文化の充実を伝えるとともに、キューバ文学の見取り図にして、キューバの歴史そのものでもある。

論文は問題設定を行った序章が冒頭におかれ、その後全三部に分かれ、各部三章立て、合計九章からなり、最終章は結論部となっている。

序章では、キューバ文化のさまざまな出来事が結集する1943年という年号を足がかりに当時の文化潮流を論じた。キューバはホセ・レサマ＝リマの描くように楽園なのか、それとも、ビルヒリオ・ピニエーラの描くように監獄なのか。二十世紀半ば、ヨーロッパや米国から芸術家が帰郷する中で生まれたキューバを描こうとする流れは、キューバ文学における二つの詩学、「肯定の詩学」と「否定の詩学」として言い表すことができる。革命前のキューバでは、この二つの詩学は美学上の対立として共存していた。しかし革命後、表現をめぐる「パディーリャ事件」によって「否定の詩学」は島に居場所を失い、国外に出ていくことになる。

まず第一部は「ピニエーラとアレナス」と題し、「否定の詩学」の代表的な存在であるビルヒリオ・ピニエーラの革命前の表現と、革命下で彼の影響を最も受けたレイナルド・アレナスを論じた。

第一章ではビルヒリオ・ピニエーラの作品で最も初期に発表され、彼の生涯を予見したかのような短篇作品である「落下」の分析を通じて、ピニエーラの作品世界に通底する世界観を読み取った。この作品はタイトルが示すように、より高く登ろうとす

るところに特徴付けられる近代性を愚弄する姿勢を描いているが、この世界観は彼から見た、世界におけるキューバの疎外状況を映し出したものである。また彼は、この作品のなかでひそかに自らの性も重ね合わせて描き出している。その点に気づいて読めば、この作品では、男性優位主義（マチスモ）社会において差別の対象となる同性愛者というマイノリティとしての疎外された性と、そのことによる社会進出の不可能性をも描き出していることが読み取れる。また、この短篇に描き出される断片的世界は、ピニェーラが同時期に発表した詩「島の重さ」と対応し、複数の文化を持つキューバ世界の断片性を反映したものである。それぞれの個がばらばらに因果を失って点在する世界をキューバ的な固有性とみなすピニェーラのキューバ観は、キューバの状態をヨーロッパ的な完結への途上にあるものとみなす他の表現者と対立するものだった。

第二章では、ピニェーラのブエノスアイレス滞在の意義を検討した。その意義は端的にいえば、そもそも彼がヨーロッパではなく、ヨーロッパの模倣都市であるブエノスアイレスに行き先を定めたことにある。このことによって彼は、先行する作家たちのトランスアトランティック（大西洋横断）とは異なる経路をたどり、彼のアメリカニズムを深化させることになる。当時のブエノスアイレスが、ボルヘスや彼の関わった文芸誌の存在感が増す時期であったこと、またヨーロッパからの亡命作家が住み着くなど混沌とした場所であったことも幸いする。ヨーロッパのマイナー言語で書かれたアヴァンギャルド文学のスペイン語翻訳、あるいはアンチ・キューバ文壇をあらわにした文芸誌の創刊はピニェーラにとってのアヴァンギャルド運動だった。これらを経て、彼はキューバがヨーロッパ文化のアーカイヴではなく、それらの文化の灰が散り散りになった墓場という考えを確固とし、それらの死に向き合うことではじまる生の中にキューバがあるとした。

第三章では、革命下で逮捕や投獄を経験し、その後米国に亡命して反革命運動を行っていたレイナルド・アレナスの最初期作品をとりあげ、のちに封印されたこの作品を読み解きながら、彼の作家としての出自と革命の関わりを論じた。彼の作家としてのデビューは、農村の少年を主人公とし、自然や家族との交わりを素朴に描き出すいくつかの短篇によるものだった。これらの作品のたまたまは、晩年の彼の過激なカストロ批判文書などからはかけ離れている。こうした作品が書かれ、また一定の評価を受けたのは、農村出身のアレナスが革命の文化教育政策、例えば識字教育の恩恵を受けていたからである。アレナスはその後反革命へ大きな変身を遂げるが、その変身の背景には、自由（＝書くこと）を与えてくれたはずの革命が、革命にのみ奉仕させる不自由（＝書きたいことが書けない）に反転したからである。そのとき彼の目の前にあらわれたピニェーラと彼のゴキブリ的な生を礼賛する姿勢が、ともにセクシャルマイノリティであったことも関係して、ピニェーラはアレナスにとって新しい父となり彼に指針を与えたのである。

このように第一部では、ピニェーラを中心として論じつつ、序章で示した「パディーリャ事件」以降、「否定の詩学」の作家たちの表現活動に大きな壁が立ちはだかることになった例をレイナルド・アレナスにみた。革命の文化政策は表現活動を行う人々に対し、大きな影響を及ぼしたのである。これを受け、第二部は「革命下の知識人たち」と題し、キューバ革命において文学者が果たした役割、革命と緊張状態に置

かれた文学者や批評家たち、具体的にはラファエル・ロハス、エドムンド・デスノエス、アントニオ・ホセ・ポンテの文章を中心に検討した。

まず第四章では、革命と知識人をテーマに書かれたキューバの歴史学者ラファエル・ロハスの評論書である『安眠できぬ死者たち——キューバ知識人の革命、離反、亡命』を紹介しつつ、革命期の文学者の様々な振る舞いをあとづけた。キューバの近代的民主化は1940年の共和国憲法制定によって前進し、このことによって複数意見の醸成と共存を可能にする自由な言論空間が整った。こうした環境がのちに多様な国家観勢力を結集したカストロ革命を下支えする。その一方で、革命前の文学者たちには挫折感と政治忌避、ニヒリズムが芽生えており、それを最も体現していたのがビルヒリオ・ピニューラだった。この姿勢が革命への全面降伏につながり、パディーリャらのちの世代も引き継いでいく。歴史学者であるロハスはキューバ革命における文学者の役割を重要視し、革命後キューバ文学の遺産をめぐって行われた一元的な記憶支配に批判的検討を行う。国民の記憶に対する一元的な支配は「記憶の戦争」を引き起こし、このことによって生まれた不和は国民的な和解を不可能にしている。和解を可能にするには、1940年代から社会主義革命宣言の1961年までの言論空間をモデルとしたような、複数意見に開かれた場の形成が必要だとロハスは説いている。

続く第五章では、革命後に出た小説のなかで、革命が進行中のキューバにおける知識人の苦悩をテーマとする『低开発の記憶』を論じた。この小説は映画化と同時に著者エドムンド・デスノエスの自己翻訳による英訳がほどなく出版され、特に西側では、キューバにおける言論の自由、革命を批判する表現の自由を証明するものとして驚きをもって受け止められた。しかしそのような外観はデスノエスによって修正されたテキストに基づいた読みで、実はこの本には容易に読み解けないような凝った仕掛けが施されていた。その仕掛けに着目し、ハバナで出た初版以降存在する複数のバージョン、デスノエスによる英訳版、また映画版のシナリオを参照しながら、その仕掛けを読み解いた。その仕掛けとは、革命を批判しようという著者デスノエスの立場を隠す機能をもち、そのことでこの小説は革命にとって模範的な小説として成立していた。

第六章では、やはり革命下における表現をテーマに小説や試論を書いているキューバ作家のアントニオ・ホセ・ポンテを取り上げ、キューバに出版の道を見つけれない彼にとってアルゼンチンが、かつてのピニューラにとってと同じように「文学的亡命地」となっていることを論証した。アルゼンチン、とりわけブエノスアイレスは歴史的に多くの亡命者を受け入れ、彼らの文学活動を保護してきた。21世紀に入ると、国内での発言の場を失ったポンテは人的な交流もあったアルゼンチンの研究者らに注目され、それをきっかけにアルゼンチンの出版社から本を出すようになる。そうして書かれた作品を、先のラファエル・ロハスの問題意識と通底する革命政権の文化政策、とりわけ「正典」を中心に行われる一元的な読みへの批判が込められているものとして読み解いた。

以上のように、第二部では革命が進行するなかで定められた文化政策が表現活動に抑圧として働いてきた経緯や、実際に抑圧を感じているなかで文化政策に対する批判を込めた表現活動を行った作家たちを検討した。ピニューラやパディーリャら「否定の詩学」をキューバ文学の遺産として認めない流れが確固とされ、革命から切り離してキューバを描く立場も、革命から切り離して過去のキューバ文学を議論する立場も存

在が難しいことが確認された。それを受け、第三部では、それではいったい革命の文化政策が目指した芸術とは何なのかを検討することにした。革命によって保護を受け、革命そのものによって生を得た文学作品である。序章でみた二つの流れのうち、「肯定の詩学」として読まれる作品を分析するパートである。

第七章は、1970年代の革命文学の「正典」がどのようなジャンル、またどのような作品であるのかを論じた。主だった文学賞の受賞作品などから5作品を選び、「革命推理小説」と「テストimoniオ」、またその融合形とも言える作品を検討した。これらの分析を通じ、1970年代のキューバ文学は、革命前を悪、革命後を善とするような構図のもと、「革命推理小説」や「テストimoniオ」を生み出し、これらが芸術を広く国民に与えようとする革命政府によって喧伝されていったことを確かめた。こうした流れには、この時代の文学は何よりもキューバ固有の物語としてキューバ革命を描くことが求められ、しかもそのときには、虚構よりも事実を置く傾向が見られた。そしてそれに応じて書き手のプロフィールも、観察者というよりは革命に参加した経験のある当事者、あるいはその当事者に近い書き手となっていることが確認された。

第八章では革命以降のキューバに流入し、およそ30年にわたって濃密な関係を築いたソ連の文化との関わりをキューバ作家がどう描いたのかを中心に検討した。取り上げた作品はどれもポストソ連時代に入ってから書かれたもので、ソ連との関係の深かった時代の記録として読むことができる。分析の際には、ソ連時代のキューバを振り返る眼差しに注目し、かたやソ連文化を懐かしむ、一種のノスタルジーにとらわれている作品もあれば、かたやソ連時代を懐かしく思いながらも、その時代と決別し、新しい時代を迎えようとするキューバ人に対する呼びかけとなるような作品もあることを確かめた。さらには、ロシア人を母、キューバ人を父とし、ソ連(=ロシア語)経験とキューバ(=スペイン語)経験の双方をもっている作家もおり、こうした作家たちが存在感を示していることが確かめられた。

第九章では革命イデオロギーの維持と喧伝の中心的な役割を果たしている文化機関「カサ・デ・ラス・アメリカス」に光を当て、キューバ以外の作家を対象に与えられることの多い小説部門の受賞作を分析した。ラテンアメリカでは最初にチリに新自由主義が持ち込まれて以降、ジェントリフィケーションが進み、その流れと軌を一にする文学の潮流も生まれた。しかしそうした時代の潮流とは無縁にあるキューバでは、文化機関「カサ」がその流れに抵抗するような文学作品を評価している。具体的にはメキシコの作家ダビー・トスカーナの『天啓を受けた勇者たち』を取り上げ、この作品に見られる反帝国主義、反米主義を、21世紀の「キューバ文学」として読み解いた。

そして最終章の結論部では、以上の9つの章を踏まえ、本論文の意義を検討した。革命によって、いかに「肯定の詩学」と「否定の詩学」が変容したのか、その中でキューバにおける文学者の表現の多様さを育んだ出版文化の役割を明らかにし、本論文がたどるキューバ文学史がキューバ史を映し出すものであることを示した。